▶はじめに

この本は、方言研究の視点を生かして日本語のしくみを基礎から考え、そのしくみを解き明かすために試行錯誤するための本です。

なぜ方言研究の視点から考えるのか説明しましょう。端的にいえば、方言には標準語にない言語事象が豊富にあり、それを視野に入れて考えることで日本語の姿を真に理解することができるからです。例えば、「日本の食」について考えるとします。日本各地のおいしい食材や郷土料理を抜きに「日本の食」を語れるでしょうか？　同じように、ことばについて考えるときも、この列島に広がる多様な方言の姿を視野に入れなければ、大事なものを見落としてしまいます。自分の方言を見つめ直したり、知らない方言から新しい発見を得たりすることで、日本語のしくみを広く深く解き明かします。

そもそも「標準語」とは多くの日本語話者が“標準”として想定することばですが、“標準”どおりに生きる人がいないのと同じく、“標準”どおりに日本語を話す人も実際にはいません。人に個性があるのと同じく、ことばにも個性があります。そのひとつひとつを視野に入れることで、日本語の姿を真に理解できると私たちは考えます。ことばの個性としてはさまざまな要素が考えられますが、本書では、地域性という要素にもとづく方言の多様性から日本語の姿を捉えます。

それに、「日本語の〇〇方言と同じ現象が海外の△△語にもあった！」というのはよくあることです。国内の方言について知ることは、世界の諸言語を知ることにつながります。方言は昔からローカルに使われてきたことばですが、その方言について考えることは、極めて現代的でグローバルなテーマでもあります。

そして、この本は読者の皆さんとともに「考える」ことを目的にしています。私たち著者は日本語のしくみをよくわかっていません。わからないから研究を続けています。その研究の輪に、皆さんにも加わってほしいというのが願いです。この本は大学の授業の教科書として使われることも想定していますが、私たちに「教える」つもりはありません。方言を前にした私たちの目には、多くの謎がみえてきます。その答えは、私たち著者にもわかりません。だから、ともに「考える」のです。この本に書いてあることは唯一の正しい答えではありません。もし、よりよい答えを思いついたら、ぜひ教えてください。そうすれば、皆さんも研究者です。

この本の構成について説明しましょう。まずは導入として「私たちは日本語のことをよく知らない」ということを実感してもらいます。「自分は何も知らない」という無力感が

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

学問の出発点です。その無力さに気づいて立ち上がり、ひとつひとつ地道に解き明かしていくのが研究の面白さです。「自分たちは何でも知っている」という傲慢な指導者にしたがってはいけません。

そのうえで、この本では、“音”、“語”、“文”の順に日本語のしくみを考えていきます。日本語に限らず、人間の言語は、いくつかの“音”をそもそもの基本として持っています。そして、「a」「m」「e」という音の組み合わせが「雨」という語になるように、“音”の組み合わせから“語”が生まれます。さらに、「雨」「が」「降る」という語の組み合わせが「雨が降る。」という文になるように、“語”の組み合わせから“文”が生まれます。せいぜい数十しかない“音”をもとに無限の“文”が生まれ、言いたいことを自在に表すことができるというのが言語の面白さです。

“文”を成り立たせるしくみが文法です。日本語では、述語にさまざまな要素がくっつくことで文の意味が成り立ちます。例えば、「太郎は先生に褒め-られ-てい-た-だろう-ね。」という文では、ヴォイス表現の「られ」、アスペクト表現の「てい」、テンス表現の「た」、モダリティ表現の「だろう」「ね」がくっつくことで文の意味が成り立ちます。本書では、このように述語にくっつく要素について、活用の基本概念をふまえたうえで、くっつく順番ごとに考えていきます。見慣れない用語が出てきて難しく感じられるかもしれませんが、安心してください。私たちの合言葉は「何も知らない」ということです。「何も知らない」ということを前提に、基本的な概念から考えていきましょう。

さらに、敬語などの待遇表現、語彙の体系性、言語変化というテーマを設けて、日本語のしくみを幅広く捉えます。最後に方言研究の方法についても考え、日本語の謎を解き明かす実践として、自ら方言調査に出向く準備もしたいと考えます。

本書を読んで考えたことは、皆さんの人生に必ず役立ちます。なぜなら、人間はみな、ことばを使って自分の思いを表現し、他者の思いを理解するからです。皆さんが人間である限り、ことばについて考える経験は、皆さんの生活を豊かにします。研究の苦悩と愉悦を、ともに存分に味わいましょう。

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

目　次

■はじめに … 2　■本書について … 4

第１課　私たちは日本語を知らない …… 10
第２課　母音と子音 …… 18
第３課　五十音図と特殊拍 …… 26
第４課　アクセント …… 34
第５課　形態素 …… 42
第６課　語と句 …… 50
第７課　格ととりたて …… 58
第８課　複　文 …… 66
第９課　活　用 …… 74
第10課　ヴォイス …… 82
第11課　アスペクト・テンス …… 90
第12課　モダリティ …… 98
第13課　待遇表現 …… 106
第14課　語　彙 …… 114
第15課　言語変化 …… 122
第16課　方言研究の方法 …… 130

■参考文献一覧 … 138　■おわりに … 141　■索引 … 143

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第1課　私たちは日本語を知らない

話せるけど知らない?!

日本語を母語とする人々（以下「私たち」と書きます）はみな日本語を使いこなしています。しかし私たちの多くは日本語を知りません。皆さんは「日本語を使っているのに知らないってどういうこと?!」と思われるかもしれません。でもすぐにわかります。この課では「私たちは日本語を使えるが日本語を知らない」ことを体験してもらいます。

「ん」?!

基本問題 1

「ん」の発音を意識しながら、次の 3 つのグループの語を言ってみましょう。

（1）a. さんばい（三倍）・さんま（秋刀魚）
　　b. さんだい（三台）・さんた（サンタ）
　　c. さんがい（三階）・さんか（参加）

（1）の「ん」を発音するときに、(1a)〜(1c) でそれぞれ口の形や舌の位置が違うことに気づいたでしょうか？ おそらく、皆さんの口の中の様子をことばで説明すると（2）のようになり、顔の断面図で示すと図 1 のようになっているはずです。[　] の中に音声記号を記しましたが、これについては第 2 課で説明します。ここでは単に 3 つの発音を区別して表すための記号だと思っておいてください。

（2）a. 三倍・秋刀魚の「ん」= [m]
　　唇を閉じている。「マ」のときと同じ口の形になる。
　　b. 三台・サンタの「ん」= [n]
　　唇は開いていて、舌の先が上の前歯の裏にくっつく。「ナ」のときと同じ位置に舌がくっつく。
　　c. 三階・参加の「ん」= [ŋ]
　　唇は開いていて、舌の根っこあたりが喉の入り口にくっつく。「ガ」のときと同じ位置に舌がくっつく。

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第4課　アクセント

アクセントとイントネーション

音の高低に関する概念のうち、主に、1つの語を単位に考えた音の高低をアクセント、複数の語や文全体を単位に考えた音の高低をイントネーションといいます。

1つの語のどこを高く発音するかはアクセントの問題です。基本的に1つの語に1つのアクセントの上下動の山があります。この上下動の山によって、どこからどこまでが1つの語なのかがわかります。例えば、「いまひとつ」が1つの語、「今、ひとつ」が2つの語であることは、上下動の山が1つなのか2つなのかでわかります。

（1）「あの映画、面白かった？」「うーん、いまひとつ」

（2）「お子さんは何歳ですか？」「えーと、今ひとつ」

図1　「いまひとつ」(左) と「今、ひとつ」(右) のアクセント

サウンド8

基本問題1　サウンド9

次の文は音の高低のつけかたによって意味が変わります。サウンド9の音声を聞き、上の「いまひとつ」の例にならって、どう意味が変わるか説明しましょう。

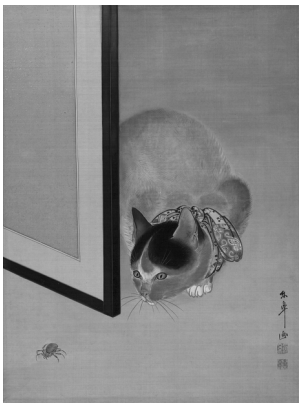
（3）ほらあな　（4）くじを引いてもらった　（5）ねえちゃんと風呂入ってる？

（3）
（4）
（5）

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第10課　ヴォイス

ヴォイスとは？



右の場面を描写する標準語の文を２つ書いてみましょう。

（１）　猫（　が　）クモ（＿＿＿）見（＿＿＿＿＿）。

（２）　猫（　に　）クモ（＿＿＿）見（＿＿＿＿＿）。

たった１つの場面を描写しているにも関わらず、言語を用いてそれを描写する場合、複数の言いかたが可能です。これは人間言語の大きな特徴の１つといえます。

さて、上の（１）と（２）はまったく同じ場面を描写しているのですが、言語表現としての意味は異なります。では、その言語表現自体はどのように異なっているでしょうか？　（１）では、「猫」の後に「が」が、そして「クモ」の後に「を」が用いられているはずです。それに対して、（２）では、「猫」の後には「に」が、「クモ」の後には「が」が用いられ、さらに動詞に「られ」が追加されているはずです。

このように、動詞の側に形態的変更が加えられ、かつ、名詞と格助詞の側にも変更が加えられる現象を**ヴォイス**（または**態**）といいます。狭い意味では**受身**や**使役**だけのことを指す場合がありますが、本課では、**可能**や**自発**なども含んだ広い意味でのヴォイスについて勉強します。以下のようなものです。それぞれ、動詞、名詞、助詞の交替があることがわかると思います。

能動文：トムは昔の恋人のことを思い出した。

受身文：トムに昔の恋人のことを思い出されて、ジゼルは怒った。

使役文：ジゼルはむりやりトムに昔の恋人のことを思い出させた。

可能文：トムにはまだ昔の恋人のことが思い出せる。

自発文：ふと昔の恋人のことが思い出された。

基本問題１

日本語（標準語）と英語の受身を比べることで、日本語の受身の特徴をみていきます。（１）～（４）の例文をみて、英語と日本語の受身の違いを考えてみましょう。

（３）　A cat looked at a spider.

（４）　A spider was looked at by a cat.

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers